

【矢守 克也 氏】

災害リスク・コミュニケーションの新しいかたち

これまで多く使われてきた災害リスク・コミュニケーションの方法に少しアレンジを加え、新しい方法として「3つ」紹介したいと思います。

～防災ゲーム「クロスロード」～

クロスロードは「分かれ道」という意味で、大事な決断・選択を意味する英語で、阪神・淡路大震災のときに実際に起きた出来事をもとにクイズ形式の教材をつくりました。

例えば子供たちに次のような問いかけをして、イエスカノーかで答えてもらいます。「津波が迫る中をおじいちゃんが逃げています。このおじいちゃんをあなたは助けに行きますか」、また、「そのおじいちゃんが知り合いだったら?」「そのおじいちゃんが自分のおじいちゃんだったら?」、そして最後に「あなたのおじいちゃんは君たちに助けに来てほしいと思うだろうか」。そうすると、子供たちもここではっきりしてくれます。おじいちゃんのほうはもしかしたら「もうおまへたちは先に逃げろ」と思っているかもしれない、といった想像力を働かせてもらうようにしています。

これらの問いに正解は無く、できる限り後悔せずに済むように判断できる準備を含めてリスク・コミュニケーションをしたり防災教育をしたりすることが大事です。

～個別避難訓練タイムトライアル～

高知県四万十町興津という地域では、地震が起きてから約 20 分で人の住んでいるエリアに避難が困難になるような 30 センチぐらいの津波が到達し、最大 20 メートル以上の津波がやってくる危険性のある、高齢化率が昨年 50%を超えた地域です。

この地域では、津波による被害を防ぐために、これまでもデイサービスや保育所の高台移転など整備を進め、これを生かす意味においても、一人の住民の方に焦点を当て、「これはあなたの訓練ですよ」という状況をつくって避難訓練をしています。その訓練をビデオで撮影し、避難の仕方全てを浮き彫りにした動画カルテをつくり、ご家族の方ともう一度見ていただく「個別避難訓練タイムトライアル」という活動を行っています。

住民一人一人が防災の主役となる避難訓練をする狙いは、諦めず、油断せず、災害との闘いに勝つことです。また、家族や子供たちから「もっとこんなところに気をつけたほうがいいよ」とメッセージをもらうことで、次はもっと頑張ろうという気持ちになります。リスク・コミュニケーションに関しては、誰が伝えるのかという視点が大切なのです。

～災害メモリアルKOBÉ～

阪神・淡路大震災を経験していない子供たちに、震災発生当時にその子供たちと同じ位の年齢だった被災者に災害を語っていただく取り組みです。

震災から 14 年目には、震災当時、小学 1 年生だった井上奈緒さんに神戸市灘区の小学 5 年生を対象に語っていただきました。井上さんのお父さんは震災当時、神戸市のレスキュー隊の隊長でした。小学 1 年生だった井上さんは、高校卒業後、お父さんと同じ神戸市の消防士になりました。災害が人や家族にどんな影響を及ぼしたのか、このような語りも阪神・淡路大震災の伝え方の 1 つだと思います。

阪神・淡路大震災から 20 年たつてこのように生まれてくるもの、熟成されてくるものもあるということにも目を向けながら、リスク・コミュニケーションについて考えていきたいと思っています。

【河田 恵昭 氏】

災害多発時代の安全・安心を実現する

～近畿地方に地震が起こったら～

我が国の最近の災害環境は、地震から始まって、洪水、津波、高潮、土砂災害、噴火、海岸侵食と、枚挙のいとまがないような形でどんどん悪くなっています。

南海トラフ巨大地震で起きる津波は、50 キロもの長さがあり、大阪では高さが 3.8 メートルにも達します。大阪の防潮堤は 3 メートルまでの津波には耐えられますが、それ以上になると乗り越えてくるので、大阪の地

下街はキタもミナミも一波で水没してしまいます。しかし今、大阪市には津波避難ビルが 68 万人分しかありません。あと 68 万人分不足しています。

そのようなことも踏まえて対策をつくっていかねばいけません。

～知識が命を助けてくれる～

阪神・淡路大震災で2階建ての家が潰れた例を調べてみると、90%は最初に1階から潰れています。地震の際にはよく揺れても2階のほうが安全です。家具を固定することも効果的です。震度5弱で家具が倒れてきます。静岡県で地震が起きたときに負傷率が低かったのは、家具の固定率が全国平均の倍以上だったからです。「総桐のたんすだから穴をあけるな」と言う方がいるかもしれませんが、「死ぬ」ということと被害を受けるといことがつながっていないところに大きな問題があるのです。

土砂災害については早めの避難が大事です。大雨が止んでも山の斜面を雨水が浸透するので半日は危険です。逃げる暇がなかったら2階に上がる。無造作に1階で寝ていると被害を大きくすることになります。また、地名に「龍」「竜」がついている地域は、大雨が降ると「竜」のように土砂が流れる、そういう土地だよ、ということ先祖が教えてくれているのです。

大雨警報が出ているときは車を運転しないほうがいい。警報は1時間に50ミリの雨で出されます。なぜなら下水の処理能力が1時間に50ミリなのです。それ以上降ったら雨水が逆流して道路が冠水し、ガード下などの低い場所に水がたまります。いつもの道を走っていたら、突然水たまりに車で突っ込んで水死するという事例が後を絶ちません。

また、川から500メートル以内は、堤防が決壊したら家が流される危険性があります。500メートルといえは随分遠いので、自分に関係ないと思いがちです。しかし都市化により人が川のそばにたくさん住むようになると洪水ピークが早くきて、流量が増え、土の中に浸透しなくなります。道路が舗装されて家が建つと浸透しないので、川に水が出てきます。すなわち、川を危険にしているのは、自然ではなくて我々なのです。そういうことを知っていただくことで被害を減らすことができます。

～知識は自分から取りに行く～

災害から身を守るためには勇気が要ります。例えば土砂降りの雨の中、避難をするには勇気が必要です。しかしこの勇気がないと被害に遭ってしまいます。

必要な知識は自分から取りに行ってください。待っていてはだめです。どうやって命を守るか。今は情報がたくさんあります。知らなかったら知識がないのと同じになってしまうということを知っておいていただきたいと思います。